

# ペリー来航と嘉永六年の対外意見（一）

三 浦 顕 一 郎

はじめに

第一章 ペリー来航

第一節 ペリー艦隊の出現

第二節 日米交渉

第三節 国書受理

第四節 小括

第二章 嘉永六年の対外意見

第三章 日米和親条約

おわりに

—以上、本号  
—以下、次号

はじめに

本稿の目的は、嘉永六年六月（一八五三年七月）のいわゆるペリー来航とそれに対する当時の日本人の反応を、できるだけ実相に即して丁寧に描くことである。

今日、ペリー来航は開国日本の出発点とされ、ペリー提督上陸の地には我が国の初代内閣総理大臣伊藤博文の筆になる記念碑が建てられ、ペリー自身は日本開国の父・恩人として言及されることも多い。

また、ペリーが日本に突きつけた開国要求への対応について時の老中首座阿部正弘は諸大名はじめ広く人士に意見を募っており、そこで出された意見の内容は多様であった。しかし、今日では、ペリーの要求を受容すべしとする意見が先見の明のあるものとされ、研究対象として取り上げられることも頻繁であるのに対し、ペリーの要求を拒絶すべしとする意見は「井底の蛙の見解を免れぬもの」で「国外の事情に通ぜぬ管見者流の囁語に過ぎない」もの<sup>(1)(2)</sup>、あるいは「本能的な嫌悪と警戒、虚勢と恐怖のコンプレックス」で「およそ『閉じた社会』が全く異質的なものに接触した際に示す反応のモデルケース」<sup>(3)</sup>とされて顧みられることがほとんどないか、あるいはその中に開国論に通じる何かを探し出そうと試みられるに過ぎない。

こうした評価の根底にあるのは、その後の現実の歴史的展開によって形成された価値判断であると思われる。すなわち、「今日より観れば開国の是なるは改めて説くを俟たぬ」<sup>(4)</sup>という価値判断が、その後の歴史叙述においてペリーを開国の父・恩人とし、ペリーの開国要求に対するに開国和親論を卓論とし、鎖国攘夷論を愚論としてきたのである。

しかし、何が卓論で何が愚論かは、その後の歴史的展開によつて定められたものであり、<sup>(5)</sup>いわば歴史の後知恵である。そのような歴史の後知恵的な価値基準に基づく歴史叙述を重ねていては、ペリー来航時の実相から遠ざかる一方であろうし、一定の価値基準に基づく歴史叙述を積み重ねることによって、現代の人々から外庄に処するに順応以外の発想の多様性を失わせることにもなるう。

本稿はそのような価値判断や解釈を可能な限り排除して、ペリー来航時の実相と、それに対する人々の反応の多様性

をありのままに描き出すことを目的とする。第一章では、ペリー来航時の模様を、主に日本と艦隊のやりとりとに重点をおいて、史実に即して描く。第二章ではペリーの開国要求に対する当時の日本人の反応を紹介し、第三章では日米和親条約の締結について論じる。

## 第一章 ペリー来航

### 第一節 ペリー艦隊の出現

嘉永六年六月三日（一八五三年七月八日）朝、江戸湾海上は深い霧に包まれていた。この深い霧の中に、アメリカ東インド艦隊司令長官マシュー・C・ペリー (Matthew Calbraith Perry) の率いる小艦隊があった。

彼らは前年の一八五二年一月二十四日にアメリカ東海岸を出航し、大西洋航路で七ヶ月以上かけて日本に到達し、前夜から伊豆岬沖四〇海里の地点に仮泊していた。このとき艦隊はペリーの指令で、「敵と対戦する前になされる一切の準備」を行っていたという。すなわち、活動準備のため甲板を片付け、大砲を所定の位置に据え、装弾し、小銃も用意し、哨兵および各員は所定の部署に付いていた。

この小艦隊は四隻の軍艦からなっていたが、俗に言う「四隻の蒸気船」ではなく、二隻の蒸気船と二隻の帆船からなっていた。旗艦「サスケハナ」(USS Susquehanna 蒸気外輪フリーゲート)、「ミシシッピ」(USS Mississippi 同)、『

「サラトガ」(USS Saratoga 帆船)、「プリマス」(USS Plymouth 同)で、二隻の蒸気船がそれぞれ二隻の帆船をすなわちサスケハナがサラトガを、ミシシッピがプリマスを曳航していた。二隻の蒸気船が二隻の帆船を曳航していたのは、当時の蒸気船が大量の石炭を消費するため、燃料を搬送する帆船が必要だったからである。<sup>6)</sup>

三日朝、艦隊は江戸湾に向かつて航行を開始した。朝の霧は濃く、艦隊の記録によれば、

「この朝は空が非常に曇って霧が濃かったので、不幸にも眼界は極めて狭く、噂に聞く日本の天気の特徴が確かめられたやうに思われた。そして艦隊が浦賀の町の沖合に碇泊するに至るまでは、海岸の形をはつきりと知ることが不可能であつた<sup>7)</sup>」

ほどであつたという。

しかし、この霧は前夜の激しい雨のせいであつたから、日中には霧は晴れ、照りつけるような日差しとなった。この日差しの中、地元で鮑漁に従事していた漁師たちや浦賀奉行所の見張り番が艦隊を発見した。それは日本に初めて現れた蒸気船の発見でもあつた。

艦隊が発見された時刻は、「未上刻」というから、午後二時から二時四〇分頃のことである。<sup>8)</sup>このとき蒸気船は帆を下ろし、江戸湾に向けて汽走していた。その方が湾内を自在の航行できるからである。その時の模様を、艦隊の記録は、「風があつたにも拘らず汽船は帆を全部捲き下ろして、八乃至九節の速度で進んだので、海岸に群つたり湾口の水面に散らばつたりしてゐる日本漁船の乗組員を驚かしたのであつた。彼等は自分達の船の上に立ち上つて、日本の海に現はれた最初の汽船を眺めながら、明かにいたく驚愕の色を現はしてゐた」<sup>9)</sup>

と、いささか得意気に記している。

蒸気船が帆を下ろし汽走していたのは、その方が湾内で自在に航行できるからであつたが、そればかりでなく、蒸気船を初めて目にする日本人に対するデモンストレーションの意味もあつたかもしれない。

ペリーは本國で「汽走軍艦の父」と呼ばれるように、アメリカ海軍の汽走軍艦化を推進してきた人物であつた。それはアメリカ海軍最初の汽走軍艦であるフルトン号の艦長に就任した一八三七年一〇月に始まり、ついで大型汽走軍艦の建造計画に当たり、一八三九年に総トン数一六九二トンのミシシッピ号、一八五〇年に二四五〇トンのサスケハナ号、五二年に二四一五トンのポーハタン号の建造に成功していた。当時、世界最大の海軍國であつたイギリスが所有していた汽走軍艦は、最大のもので一〇五六トンのスフィンクス号、ついで八三〇トンのヘルメス号、八一八トンのサラマングダ号であつたから、汽走軍艦は新興國アメリカが世界に誇るべき「文明の象徴」であつた。ペリー艦隊の公式記録に見られる、蒸気船に対する誇らしげな、あるいはやや感情過多な論調には以上の背景があつた。

さて、第一発見者たちからの通報を受けて浦賀奉行所の番船が艦隊に向かつた。しかし両者の速度が違い、奉行所の船は艦隊に追いつくことができなかった。この出来事についても艦隊の記録は

「吾々はそれを待たうとしなかつたので、彼等は間もなく後ろに取り残されてしまった。彼等は風に抗して進む速の汽船を見て疑もなくひどく狼狽してゐた」<sup>①</sup>

と誇らしげに記している。

一方、日本側の記録でも、このことは、

「其速なること飛が如く、諸方之注進船を遙に乗越へ、不計入津に付、浦賀中之騒ぎ鼎之沸が如し……船をば逆に繰戻し候手際、其神速自在の妙目を驚し」(蒸気船の速さは飛ぶようであり、諸方にいる日本側の番船を追い越し、湾内に入った。そのため浦賀の騒ぎは鼎が沸くようである。……蒸気船は進退自在で、目を驚かすものであった。)あるいは、

「二艘は総体鉄張之蒸気船にて……進退自在」、艀を用いずに「迅速に出没」し、「応接之もの寄せ附不申」(二艘は全体が鉄張りの蒸気船で、進退自在であり、艀を用いずに迅速に出没し、日本の番船を寄せ付けなかった。)

と、その蒸気の力による自在な航行に驚愕の念をもつて記されている。<sup>⑬</sup>

しかも、その大きさも、当時の日本では大船の建造が禁止されていたから、最大のものでも千石船と呼ばれる約一五〇トンの廻船であった。これに対し艦隊側は先述の通りサスケハナ号が二四五〇トン、ミシシッピ号は一六九二トン、帆船のプリマス号でも九八九トン、サラトガ号は八八二トンで、千石船の約六〜一六倍の大きさがあり、日本側の耳目を驚かすに十分であった。

また艦隊に備えつけられていた大砲は約一〇〇門、そのうち大きなものは一〇インチ砲が二門、八インチ砲が一九門、三三ポンド砲が四二門の計六三門であった。これに対し浦賀など江戸湾沿いの砲台に据えられた大砲は約一〇〇門のうち、そのうち艦隊に匹敵する規模のはわずか二〇門ほどにすぎなかった。艦隊の四隻だけで優に日本側の三倍を超えていたのである。<sup>⑭</sup>

午後五時頃になってようやく艦隊が投錨・碇泊したので、浦賀奉行所与力の中島三郎助・香山栄左衛門・近藤良次・佐々倉桐太郎らと通詞の堀達之助・立石得十郎が艦隊に向かった。<sup>17</sup> 艦隊の四隻のうちどれに乗り付けるべきか議論になったが、通詞が、中心の帆柱に旗を掲げているのが「外国之法にて、主役之者乗組居候標章」（外国の法では長官が乗っている印）であることを知らせたので、それに乗り付けた。<sup>18</sup> それは旗艦のサスケハナ号であった。

このあとのサスケハナ号と与力たちのやりとりは、日米の史料の間で相違がある。理由は後述するが、日本側の史料にはいくつか辻褄の合わないところがあるので、ここでは主としてアメリカ側の史料に拠って稿を進める。

アメリカ側の史料である艦隊の公式記録によれば、サスケハナ号の舷側につけた日本側の船中で一人が紙の巻物を手にしており、サスケハナ号の士官が受け取りを拒否すると、今度はミシシッピ号の舷側に移動し、船中でそれを開いて高く掲げ、甲板から読めるようにした。そこにはフランス語で、「貴艦は退去すべし、危険を冒してこゝに碇泊すべからず」と書かれていたという。<sup>19</sup>

それから日本の船は再びサスケハナ号の舷側に来て、舷梯を下ろすように手真似をした。しかし、艦隊はこれを拒絶し、さらに中国語通訳のウィリアムスとオランダ語通訳のポートマンに命じて、「提督は最高の役人以外の何人をも引見せず、貴下は帰還すべし」と言わせた。<sup>20</sup>

オランダ語通訳の堀達之助がオランダ語のできる旨を英語で告げ、それからは艦隊オランダ語通訳のポートマンと対話になった。堀が艦隊の国籍と来航目的を尋ねると、ポートマンはアメリカの船であり、日本国皇帝宛の大統領書簡を所持する高官が乗っていると答えた。その他にも堀はオランダ語で色々と質問を浴びせかけたが、ポートマンは答えなかった。<sup>21</sup>

堀はしきりに乗船許可を求めたが、ポートマンはこれを拒絶し、「艦隊の司令長官といふ役目は合衆国に於て最高位のものであり、長官はたゞ浦賀の最高役人とのみ商議せんとするものだ」と告げた<sup>22)</sup>。

すると堀は傍らの一人を指差して、「この人はこの町に於ける高官で、引見さるべき適當の人物である」と述べ、浦賀副奉行であると紹介した。それは実際は与力の中島三郎助であつた。ポートマンが「何故に奉行自ら来なかつたのか」と尋ねると、堀は「法律によつて奉行は投錨中の船艦へ乗船することを禁ぜられてゐる」と答えた<sup>23)</sup>。

そして、堀は「政府は艦隊来訪の目的を通過し度いから、提督におかれても副奉行に相当する地位の士官を任命して商議せしめられたし」と申し込んだ。これがポートマンからペリーに伝えられると、ペリーはこの身分詐称を信じたく<sup>24)</sup>く、副官のコンティに命じて中島と面会させることにした<sup>25)</sup>。

こうして与力の中島三郎助が「浦賀副奉行」を詐称することによつて、サスケハナ号に乗り込んでペリー代理人のコンティ大尉と面談することが可能になつた。なお、浦賀副奉行という実際には存在しない。当時の浦賀奉行の職制は奉行が二人（一人が浦賀に、もう一人が江戸に在勤し、この当時は在浦賀の奉行が戸田氏栄、在江戸の奉行が井戸弘道であつた）、その下には支配組組頭が二名、その下に与力が二〇人、その下に同心一〇〇名であつた。実際に存在しない役職だから、現実の誰ともバッティングせずに、とっさにつきやすい嘘だったのかもしれない<sup>26)</sup>。

ところで日本側の史料には、この身分詐称について記述がない。不都合な事実として記述が省かれたのであろう。そのために日本側史料にはいくつか辻褄の合わないところも生じている。

しかし、与力の中島三郎助が「浦賀副奉行」を詐称することによつて、通詞の堀達之助とともに米艦に乗り込むこと



ができたのであり、この詐称なしに日本側が艦隊と直接交渉することは恐らく不可能であつたろう。

それというのも、ペリーは「日本政府に対して断乎たる態度を執ること」を来日前から決めており、そのためには日本のルールに従う気も、日本の要求を容れる気も、彼にはなかったからである。彼は「当局者の行動並びに威嚇などは顧慮せずと決心」していたのである。<sup>(17)</sup>

ペリーは、「自分が排他的にすればする程、且、自分の声明した意嚮を頑強に固執すればする程、この形式ばつて儀礼好きな人民は、自分に益々尊敬を払はんとするであらう」と考え、「熟慮の上……同帝国の最高役人以外の何人とも親しく商議しない」と決めていたのであつた。<sup>(18)</sup>

このようなペリーの考えと態度と行動を考えるならば、幕府支配機構の一端にすぎない与力たちが、日本の国法に従いながら、江戸湾に現れた異国船を検閲するという職責を果たすことは、身分の詐称なしには不可能であつたろう。

なお、加藤祐三氏の指摘によれば、身分の詐称はペリー自身も別の理由からこれを行っていた。すなわち、ペリーが海軍長官ら与えられた正式の役職名はアメリカ東インド艦隊司令長官 (Commander in Chief U. S. East India Squadron) であるが、彼は中国で駐華弁務の官マーシャルと意見衝突、このままではマーシャルの命令を受けなければならなくなると考え、自己の判断で自分の役職名を変更して Commande in Chief U. S. naval forces in the East India, China and Japan seas とした。今回の日本来航の際には、彼はこの職名を使っている。翌年の再来航の際にはさらに追加して、自分の職名を Commander in Chief U. S. naval forces in the East India, China and Japan seas and Special Ambassador to Japan と「遣日特別大使」の字を加えている。<sup>(19)</sup>

さて、サスケハナ号に乗り込んだ中島と通詞の堀は艦長室に通され、旗艦付副官のコンティ大尉と会談することとなった。ペリー自身は「故意に長官室に閉ぢ籠つて、副官を通じてのみ日本人と交渉を進めた」。だが、実態はペリーとの会談であつた。長官室のペリーから指示が出ていたからである。<sup>30)</sup>

中島はコンティにまず来航の趣旨を問うた。これに対しコンティは、本国からの日本国皇帝宛の書簡を渡すためであると答えた。ついで中島は、当地が外国人応接の地ではないことを理由に、長崎に回航するよう要望した。しかしコンティはこれを拒絶し、「提督は浦賀が江戸に近い故にわざわざここへ来たので、断じて長崎に回航せず。提督は今滞在してゐるところで親書が然るべく受納されることを期待して居る」と述べた。<sup>31)</sup>

中島はそれに対する回答を留保し、いったん浦賀に戻つて奉行に聞いてから答える述べた。ついでコンティは、当方に用があるときは旗艦に来てもらいたい、全て当船で応対すると述べた。中島はそれを承諾し、さらに旗艦の船号、将官の姓名、乗組人数などを尋ねた。しかしコンティは、当艦は軍艦であるから答えられないとして、中島の質問に答えることを拒否した。中島は、それらを尋ねることは日本の国法であるからと重ねて尋ねたが、それに対しコンティは、日本の国法であろうとも、軍艦は世界のどこに行つてもそのようなことを聞かれることはないものだと言つた。<sup>32)</sup>

いったん浦賀に戻つた中島は、浦賀奉行の戸田氏栄から指示を受け、再びサスケハナ号に乗り込んだ。そして中島はコンティに向かい、先ほどの話を奉行にしたところ、やはり当地は外国人応接の地ではないので、長崎に回航してもらいたいとのことであつたと告げた。これに対しコンティは、それはできない、そちらが当船に高官を寄こすか、当方から持参するかだ答えた。中島は明朝の返事を約して艦を辞した。<sup>33)</sup>

なお、この会談の最中、アメリカ側は突然、

「提督の意向は全く友好的なものであるが断じて無礼を許さず。且吾が船艦の周囲に群つてゐる防備船がいつまでもここに留ることを許さず。もし防備船が即刻徹底せざる時には武力に訴ふべし」<sup>34</sup>

と言ひ出した。これが日本語に訳されると、中島は直ちに周囲の防備船に撤退するように命じ、大半の船は岸に帰った。それでも二、三の防備船が残っていたため、艦隊は一隻の武装艇を出動させて威嚇した。これによつてすべての防備船が撤退したという。<sup>35</sup>

ペリーはこの出来事について「第一に成就することの出来た重大な点だつた」と誇つてゐる。先にも触れたように、ペリーは「日本政府に対して断乎たる態度を執ること」を決めており、すでに江戸湾に近づく際、艦隊の各艦に信号を発し、「敵と対戦する前になされる一切の準備」を行わせていた。<sup>36</sup> その後も「最悪の場合を予想して、艦隊に対して絶えず完全な準備をさせて置き、戦時中と全く同様に乗組員を徹底的に訓練」していた。<sup>37</sup>

彼は「祖国の代表者として、又頭上に翻へるあの国旗の名誉を擁護するやうに任ぜられた者として」、日本人に「最も解り易い方法」で、すなわち「厳然と自らを高く持することによつて」、「自分を派遣してよこした国家を尊敬せしめるやうに教へ、又外国人に対する習慣である日本人の驕傲にして無礼な態度を、一時廢するやうに教へることは、よいことだと感じ」ていたのである。<sup>38</sup>

艦隊の公式記録は、日本の防備船を追い払つたことについて、「平和な訪問者に対して武力を押し付けると云ふ侮辱をば、ペリー提督は直ちに、断乎として拒絶」し、「こけ嚇しや見せかけの武力によつてアメリカ人を驚かせ逃走させようとの試みの馬鹿馬鹿しいことをば、それによつて日本人に教へ」たと特記している。<sup>39</sup>

この日の夕方、ペリーの艦隊は、江戸湾に向けて空砲を放つてゐる。

この夜、流星群を見たとの報告を当直のデューアー大尉から受けたペリーは、

「特異で半ば野蛮な一国民を文明諸国民の家族の中に組み入れようというわれわれの当面の試みが、流血の惨事なしに成功できるようにと神に祈るものである」

と日記に記した。<sup>④</sup>すなわち、ペリーは日本との交渉が平和裡に行われることを祈りながらも、日本（人）は「特異で半ば野蛮な一国（民）」であり、自らの使命はそのような日本（人）を彼らの住む「文明諸国民の家族の中に組み入れることであると認識していたのである。

一方、浦賀奉行の戸田氏栄は、米艦から戻った中島から艦隊の強硬な態度を聞き、「不容易軍艦にて、此上之変化難計」（容易ならぬ軍艦で、これからどうなるか計り難い）と記した意見書を老中に送った。<sup>④</sup>

## 第二節 日米交渉

（一）六月四日（西暦七月九日）

翌朝（嘉永六年六月四日・西暦一八五三年七月九日）、今度は与力の香山栄左衛門が浦賀奉行を詐称し、浦賀の最高の役人であるとしてサスケハナ号に乗船許可を求めた。ペリーはそれを信じ、乗船許可を与えた。浦賀奉行であることを演出すべく、香山は「孔雀の羽に似た模様を刺繍して、金と銀との縁を取ったすばらしい絹の上衣」を着ていた。艦隊の記録は「高い地位に相応しいやうな服装をしてゐた」と記している。<sup>④</sup>浦賀奉行を名乗る香山には、ペリーはコンテ

だけでなく、ブキャナンとアダムスの両大佐にも応対させた。

この日の会談も、前日と同様に、来航目的や長崎回航について確認が行われたが、その一方で香山はそれまで知らなかったことを聞かされた。すなわち、ブキャナンらは、このたびの浦賀来航についてアメリカは前年に日本政府に通告済みであると言うのである。<sup>43</sup>

アメリカ政府は対日使節派遣を決めた際、オランダ政府に対し、長崎オランダ商館長に適当な側面援助を与えるよう訓令してほしいと要請しており、これを受けて長崎オランダ商館長のダウンケル・クルチウスは、長崎で行われているオランダとの会所貿易を各国に拡大する通商条約案を長崎奉行に提出したが、幕府はこれをオランダの欲得ずくの行動、アメリカの脅威に事借りた「虚喝」と判断し、取り合わないことにしていたのであった。<sup>44</sup>

こうした経緯からペリーは浦賀来航については日本政府に通告済みであると主張し、長崎への回航を拒否した。そして、当地で国書を受理されるか、それが拒絶されれば我々は直ちに「十分な武力をもって上陸」して江戸に出向くかであると二者択一を迫り、我々が上陸した場合でも日本側が白旗を掲げれば鉄砲を撃ちかけることはない、白旗の使い方まで教えたという。それは武力行使の可能性の示唆と、降伏の仕方の教示であった。<sup>45</sup>

香山は返答に四日の猶予を請うたが、ペリーは三日だけ猶予すると答え、それ以上は待たないと告げた。<sup>46</sup>

この会談中、ペリーは各艦から一隻ずつのボートを出して、浦賀湾と浦賀港とを測量させた。香山が何をしているのかと尋ねると、ブキャナンは測量しているのだと答えた。香山は、そのような行動は日本の国法に反すると抗議したが、彼らは「アメリカの法律の命ずるまゝに行ふ」のであると答えた。<sup>47</sup> 測量船には「十分に人員が配備されて武装が施され

て」おり、指揮に当たったペント大尉に対しては「艦載砲の射程以外に出ないやうに」との命令が出ていた。襲撃された場合には応援隊を派遣できるよう測量隊に「絶えず十分な注意」が払われてもいた。こうした中、測量隊は縦横無尽に測深を行い、湾近く約二海里の地点まで行き、午後になつて帰艦した。<sup>43)</sup>

香山はこの日の会談から得た印象を、「船中之形成人氣之様子非常之体を相備」え（船中の人々の様子は緊迫しており）、「異人一同殺氣面に相顯」れており（一同殺氣が顔に表れており）、「心中是非本願之趣意相貫き度」いようであるから（彼らは何としても大統領国書の手交という目的を遂げたいようであるから）、「此儘書翰御受取無之ては、平穩之取計相成兼候」（このまま大統領書簡を受け取らないのであれば、とても平穩無事には済むまい）と感じ、その旨浦賀奉行に報告した。<sup>44)</sup>

ペリーの強い態度を知つた浦賀奉行の戸田氏栄は、香山を江戸に派遣した。ペリーの強硬な態度を幕府に報告し、これに対する処置を仰ぎ、あわせて国書受領を拒絶すれば、我が方の警備が手薄なため、国体にかかわる大事に至る恐れがあることを具申させるためである。同心組頭の福西源兵衛がこれに同行した。

報告と上申を受けた老中阿部正弘は、「御国体不失様相心得、可成丈け穩便に出帆候様可致候事」（国体を失わないやうに心得、なるべく穩便に出帆させよ）との指令を浦賀奉行に出す一方、浦賀奉行および江戸湾警備の四藩に非常警戒を命じるとともに（観音崎方面を川越藩、劍崎方面を彦根藩、房総方面を会津・忍兩藩が担当した）、固く輕挙を禁じた。<sup>45)</sup>

(二) 六月五日 (西暦七月一〇日)

この日、江戸では老中阿部正弘、三奉行、海防掛が集まり対策を協議したが、結論には至らなかった。<sup>①</sup>

この日の夜、阿部正弘は前水戸藩主徳川斉昭に一書を送り、ペリー艦隊に対する対策を問うたが、斉昭は「拙老兼々憂苦し建白せし事ども採用せられず〔斉昭は大船建造の禁を解くよう建白していた〕、今更如何ともする術なく当惑するのみ、今に及んでは打払をよきと計りは言ひ難く、さればとて書翰を受取らば、打払よりも更に後患を醸すべし」と述べ、「兎角衆評の上決断する外なし」と答えるにとどまった。圧倒的に彼我の軍事力の差がある以上、このような答えとならざるを得なかったであろう。<sup>②</sup>

一方、井戸邸に一泊した香山は五日に江戸を発ち、陸路浦賀に向かった。彼は浦賀に着いたのは六日早朝。そのまま戸田に江戸の報告をし、自宅に帰った。<sup>③</sup>

(三) 六月六日 (西暦七月一日)

六日早朝、ペリー艦隊の測量隊と蒸気船一隻 (ミシシッピ号) が、江戸湾内海に侵入するという事態が発生した。

この事態に、まず与力の近藤良次らが乗り入れ停止の交渉の赴いたが、艦隊側は国書受領のこと以外は一切の話合いに応じないと答え、近藤らの乗船は拒否された。

そこで自宅に戻って休んでいた香山が奉行所に呼び出され、交渉のため艦隊に向かうよう命じられた。艦隊に着いた香山は乗船を許可され、サスケハナ号上でアダムスらと相対した。

香山が内海乗り入れの理由を質したのに対し、ペリーは

「艦隊が江戸湾で決めようとした要件が、この来訪期間中に片づかなければ、提督は来春もつと大きい艦隊を率ゐて帰つてこなければなるまい。そして浦賀の前面に在る碇泊所が便利でも安全でもないから、江戸にもつと近い所で、江戸と交易し易いもつと良い場所を探したいのである」

と答えさせた。

香山は、まだ国書を受領するか否かの決定さえ下っていないのに、このように内海に乗り入れることは不都合であると重ねて苦情を述べた。<sup>54)</sup>

ペリーが測量隊をさらに湾の奥まで派遣し、かつミシシッピ号に護衛させたのは、明白に幕府に対する威嚇のためであつた。艦隊の記録によれば、この行動は

「強力な軍艦を率ゐて次第に江戸に近づくといふ勢を見せることこそが、役人等を覚醒せしめ、提督の要求により好都合な回答を与へさせることになるだらうと提督が安んじて考へてゐたから」

であるという。そして、ペリーの意図は、「予期通りさうな」<sup>55)</sup>る。幕府が国書受領を決定するからである。<sup>56)</sup>

この日、江戸では幕閣が登城して、国書を受領すべきか否か議論していた。三奉行は、今回のみ臨機の処置として国書を受領し、返書は長崎で渡すべきと主張した。海防掛の人々、すなわち大目付深谷盛房、勘定奉行石河政平・松平近直・川路聖謨らも、浦賀で外国書翰を受け取るのは先年のビッドル来航の際の例があるので、国書受領を可とする主張した。これに対し海防掛以外の大小目付は、国書受領を不可とし、長崎に回航させるか、それに応じなければ打ち



払うべしとの強硬論を唱え、結論に達しなかつた。<sup>⑪</sup>

しかし、この日の夕刻にアメリカの測量隊がミシシッピ号の援護のもと江戸湾内海に乗り入れたという情報が江戸にもたらされると、事態は急展開を見せた。

夜半過ぎに老中以下が総登城し、善後措置を協議、その結果、国書受理に一決した。<sup>⑫</sup> 幕府はこの決定を在府の浦賀奉行井戸弘道に伝え、井戸は江戸に残っていた福西源兵衛にそれを伝えるよう浦賀に急行させた。<sup>⑬</sup>

また幕府は福井・高松・姫路・阿州・熊本・長州・柳河の七藩に江戸近辺の警備に当たらせ、府内には戒厳を令し、幕臣に出陣の用意を命じた。また、芝や品川付近に藩邸を構える仙台・土州・因州藩に藩邸の警護を命じ、不慮の変に備えた。<sup>⑭</sup>

一方、ペリー艦隊のこの行動は、諸方の人士に憤懣を引き起こした。現地で警備に当たっていた川越藩の藩士は、内海に乗り入れてきたアメリカの測量船を差し止めようとしたところ、測量船では米兵が剣を抜いて船縁に立ち、また銃剣に実弾を込めて川越藩の舟の少し先を撃つなどして、しきりに威嚇したという。これに川越藩士たちは「怒に不堪」、浦賀奉行所に早船を出して、切り込みの許可を求めた。

しかし奉行所では、幕府の命は何事も穏便にというものであり、粗忽に手を出して戦端を開いては大変なことになるので、穏便に済ますようにと命じてきた。これに川越藩士たちは、これほどの恥辱を受けながら何事もなかったことにせよというのであれば、陣屋を引き払って酒でも飲んで踊っている方がよからう、と陣装束を解いて寛いってしまったという。<sup>⑮</sup>

実際、幕府はかねてから穩便を旨とせよとの内命を關係筋に下しており、例えば、

「彼氣に当り候様のこと有ては、大事を招く道理故、兎も角も穩便專要に致べし、仮令異人上陸致し、民家へ立寄候とも、格別乱妨不致候はば、其儘に見捨置べし」

というように、たとえ米兵が上陸して民家に立ち寄ろうとも、向こうの氣に障るようなことになつては大事を招くので、格別の乱暴がない限り「其儘に見捨置」くようにと命じていた。このため「浦賀にても、腫物にさわる様に致し」、それゆえ米船は「浦賀より品川迄自在に漕ありき」だつたという<sup>(62)</sup>。

このような幕府の態度に対し、諸方から不満の声が上がつた。例えば、福井藩主松平慶永（福井藩は品川御殿山の警備を命じられていた）が、前水戸藩主徳川斉昭に宛てた書簡で、幕府がかくまでも「平穩第一たるべし」というのであれば、「御固めも藁人形出し置候方」が「入費も無之」て宜しかろうと書き送っている<sup>(63)</sup>。

#### (四) 六月七日（西曆七月一二日）

七日午前一時ごろ、国書を受領せよとの命が幕府から浦賀奉行に伝えられた。そのことと、明八日に在府の浦賀奉行井戸弘道が浦賀に來着し、明後九日に久里浜で国書を受け取る予定であることを知らせるために、香山榮左衛門がサスケハナ号に向かつた。この日も艦隊は一日中測量活動が続けていた<sup>(64)</sup>。

香山と艦隊側とのやりとりでは、大統領からの国書のほかにペリーの添書や訳文の授受・授受の場所をめぐつて紛議があつたが<sup>(65)</sup>、結局、アメリカ側の主張する国書の正本・副本・訳本及びペリーの書簡を同時に受け取することに決し、また久里浜での授受についてアメリカ側が難色を示したが<sup>(66)</sup>、結局、香山の主張する久里浜での国書受理に決した。また国

書を受領する日本側の人物について、香山はアメリカの「アトミラル」(admiral 海軍大将・提督)に相当する人物であることを請け負った。

香山は、当地は外国人応接の地ではないが、今回に限り枉げて国書を受領するのであること、それゆえ国書授受の際は双方とも一言も発しないこと、返書は日本の国法に従って長崎でオランダ甲比丹か中国人を介して渡すことを主張した。これに対して艦隊側は、返書を受け取るために長崎に行くことはできない、第三者を介しての返書受理も拒絶すると述べた。

その一方で艦隊側は、回答に猶予期間を認め、両三ヶ月中に艦隊が再来航した際に返答することとした。また、香山は国書授受が終わったら速やかに本船に戻るよう要望し、ブキャナンらはこれを認めた。

その他、アメリカ側は受領人が所持すべき日本国皇帝の全権委任状の提示を求め、香山は翌日これを持参することを約した。<sup>87</sup>

(五) 六月八日(西暦七月一三日)

八日、香山は、旗艦に全権委任状を持参し、さらに国書授受の細目について打ち合わせた。

香山の退去後、ペリーは艦長会議を開き、当日は艦隊を久里浜海上の艦砲射撃の有効距離内に置くこと、ペリー上陸の際は三〇〇名の兵を上陸させることなどを決定した。<sup>88</sup>

### 第三節 国書受理

嘉永六年六月九日（一八五三年七月一四日）、ペリーは参謀長アダマス中佐以下の幕僚を従えて、艦隊が発する礼砲に送られて久里浜に上陸した。このときアメリカ側は蒸気船二隻を久里浜の前面、艦砲射撃の有効距離内に投錨させた。また三〇〇名の兵員を上陸させて埠頭から応接所までの沿道に並ばせ、威容を示した。一方、日本側は彦根藩兵二〇〇余名と川越藩兵八〇〇余名が陸上を警衛、会津藩船一三〇隻と忍藩船五〇余隻が海上を警戒し、旗本下曾根金三郎が一隊を率いて応接所を警護した。<sup>⑧</sup>

ペリーの行列の先頭には、筋骨の逞しさゆえに乗組員の中から選抜されたという二名の屈強な水兵が、アメリカ国旗と幅広い尖旗を捧持していた。ペリーの直前には、式服を着た二人の少年が立ち、大統領の親書とペリーの信任状が入った箱を捧げていた。ペリーの両脇には二人の黒人がつき、ペリーを警護した。彼らは背が高く、体格もよく、武装していたが、「かやうに行列をつくったのも全く印象を深くするために過ぎなかつた」と艦隊の記録は記している。<sup>⑨</sup>

国書授受の場では、ペリーがフィルモア大統領の親書および信任状とペリーの日本国皇帝宛書簡を、それぞれ中国語訳とオランダ語訳を付して、応接掛の浦賀奉行戸田氏栄と井戸弘道に手交した。無言の授受が約束であつたから、日本側からは受領書を手渡した。そこには、国書を受領したが返答はしないこと、国書受取のあとは速やかに帰国されよと記されてあつた。

これに対しペリーは、二、三日中に艦隊を率いて琉球および広東方面に退去する予定であること、来春の四月から五月にかけてより多くの船艦を率いて来航する予定であることを通訳に伝えさせて会見を終わつた。時間にして二〇〇

三〇分ほどであった。<sup>①</sup>

ペリー一行は国書授受の儀式を終えて帰艦するや、直ちに全艦隊に抜錨を命じ、浦賀水道を越えて江戸湾に進み、内海を北上して金沢・杉田沖に達した。

立ち去るものとはかり思っていたものが、逆に江戸湾を北上してくるという艦隊の予想外の行動に浦賀奉行以下日本側の驚愕は頂点に達し、直ちに香山榮左衛門を派遣した。来艦した香山を見て、艦隊側は、「榮左衛門とその一行は甲板出入口に急いで駆けつけ、明かにひどく腹を立て、大いに憂慮していた」と記している。<sup>②</sup>

サスケハナ号に乗り込んだ香山は、兼ねて申し上げていた通り浦賀より内へ乗り入れることは国禁であるのに、何故みだりに乗り入れるのか詰問した。

これに対し「艦長たちは落ち着き払って相手の言い分を聞くかまえを見せ」（艦隊の記録）、別に子細があるわけではなく、浦賀沖は波が高いため繋留に不都合であり、また次回の来航の際には今回より大きな船も来るので、より都合のよい場所を探すためであると答えた。

香山は、国書授受のあととは速やかに退去すると約束したではないかと詰め寄ると、艦隊側は、海岸を離れると約束しただけであり、かつ二、三日は江戸湾に滞在すると言ったはずであると述べた。

香山は、そちらの都合で国法を枉げてまで当地で国書を受け取ったのだから、このうちは万事平穩に双方が礼節を尽くすのが当然であるのに、このように勝手に内海に乗り入れられては人々の気持ちも殺気立ち、しかも互いに言葉が通じないことでもあるから、いかなる不測の事態が起こることも限らない、そうなっては元も子もないから速やかに元の場合

所に戻ってもらいたいと、辞を尽くして説得した。これに対し艦隊側は、よりよい繋留場所を探すためにあと三、四日ここに留まりたいと述べた。

香山はさらに説得を重ねたが、艦隊側でも同様の言い分を繰り返し、さらに艦隊側は「アメリカ人は友人としてやって来たので、従ってアメリカ艦隊の適当な碇泊所を探すことに反対するのは、全く理由のないことである」、「合衆国では、かかる点で外国人にあらゆる便宜を与える習慣であつて、もし日本人が合衆国に来るならば、アメリカの可航海湾が自由に開放されるのを発見するだろう」と述べた。

この日は夜になったため、軽食が供され、そのあと香山たちは艦を辞した。<sup>⑭</sup>

ペリーがこのような行動に出たのは、艦隊の公式記録によれば、「立ち去れよと云ふ二侯の命令に殆ど考慮を払つてゐないことを示すため」であり、またペリーが

「非常に大きな艦勢を測量事務にあてること、及び首府の非常に近くでそれを行ふことは、日本政府の誇と自尊心とに決定的な影響を与へ、且つ大統領の親書に対してもつと深い考慮を払はしめることになるだらう」と考えたためであつた。<sup>⑮</sup>

また香山が述べた「国法を枉げて」ということについても、ペリー側から見れば、それは「日本自身が、アメリカの勝利をはつきりと記録した」文言なのであつた。香山は艦隊のために日本が行つた慈惠的行為であり、それゆえ双方が礼節を尽くすべきであると考えたのに対し、ペリーの側は、日本が国法を枉げることとは、日本が自らの敗北とアメリカの勝利を認めた証であると思はしていたのである。<sup>⑯</sup>

翌一〇日、再び香山らが艦隊に赴いたが、この日香山は旗艦に乗り込むことができなかった。というのも、ペリーは前夜のうちに旗艦をミシシッピ号に変え、香山一行が到着する前に乗り出していったからである。

この日、艦隊は江戸湾内海をさらに進み、江戸市街を望見したあと、金沢沖へと引き返した。艦隊からは全てのボートが出て、測量に動き回った。このため江戸市街は混乱を極めたという。<sup>76</sup>

この振る舞いに、さすがに阿部正弘も、「余り輕蔑の所行、切齒の事故、直に打払までと覚悟も決し候」と松平慶永に書き送っている。

翌一一日、香山らは旗艦に乗り付けることができた。乗船した香山は、昨日の内海乗り入れの非と、自分たちを待たずに艦隊が乗り出していったことを難詰し、元の場所に戻るよう重ねて要望した。

艦隊側は繋留場所を探しての行動であると従来の説明を繰り返して、明日にでも繋留場が見つかるであろうから、明日の未明に出帆する予定であると述べた。香山は明朝の出帆を確認し、艦隊側もこれを請け負った。<sup>77</sup>

一二日未明、ペリー一行は浦賀沖を去った。国書の返答は翌春に約された。ペリーはそれを回答の猶予期間を設けるためと説明したが、実は艦隊の側にも回答を先送りする理由があった。

まず何よりも艦隊には一ヶ月以上の燃料と食料と水の蓄えがなかった。日本側が回答を引き延ばしている間に食料と燃料の備蓄が尽き、妥協を余儀なくされるようなことになっては元も子もない。

またペリーはもとも一二隻の軍艦からなる「堂々たる艦隊」を率いて日本に來航する予定であった。今回は都合が

つかず、やむなく四隻で来航したのである。「一層強大な軍事力を持つことができれば、来春において、私は一層慎重に、かつ断固として行動することができるよう」とは、ペリーの言である。

しかも艦隊にはいったん日本を立ち去る大義名分があった。混乱した中国の治安確保という新たな任務の発生である。こうした事情や理由を背景に、ペリーはいったん日本を立ち去ることとし、翌春の回答を約したのである。しかし、ペリーはそのような艦隊側の事情を一切述べることなく、ただ回答の猶予期間を設けるとだけ述べて、浦賀沖を去っていったのであった。

#### 第四節 小括

こう見てくると、ペリーが行ったことは、浦賀沖に軍艦を並べ、その圧倒的な技術力と軍事力の優位を背景に、幕府に国書の受理を迫るというものであった。それは、軍事力の直接の行使を慎重に避けながらも、軍事力の行使を匂わせて圧力をかける砲艦外交であった。彼は日本側の要求・懇請に一切応じることなく、アメリカ側の当初からの要求を見事に貫徹した。したがって、徳富蘇峰の言うように、

「彼の手柄として誇る可きは、米国のために、日本をやりつけたるにあり……彼理〔ペリー〕提督を日本の恩人とし、彼のために記念碑を建立し、彼に向つて国史の上に感謝の情を湛ふるが如きは、彼理提督当人に取りては、実に意外至極であらう」<sup>18)</sup>。



と考えるべきである。

そして、ペリーがアメリカの利益を実現するためにとった行動は諸藩の人々を憤慨させたが、幕府は「一時の権道」(一時の方便)と称して国書を受理したのであった。

- (1) 『維新史』第二巻、八九—九〇頁。
- (2) これは一九一一(明治四四)年五月に官制により文部省内に設置された維新史料編纂会が編纂し、一九四一(昭和一六)年八月にいたつてようやく完成した大著『維新史』全六巻の中の記述である。同書が今日に至るもなお維新史研究のスタンダードであることが衆目の一致するところである。
- (3) 丸山真男「開国」一七〇頁。丸山真男が戦後日本の政治学・思想史学をリードした第一人者であることは言うまでもない。
- (4) 『維新史』第二巻、八九頁。
- (5) したがってその後の歴史的展開が異なれば、何が卓論で何が愚論かの判断も異なりうる。例えば、藤田雄二氏が指摘しているように、日本より約二〇年遅れて開国し、紆余曲折の後に日本に併合される至る朝鮮では、いよいよ日本から保護条約を突き付けられるという段階で、重臣の一人の趙秉世は、かつて攘夷を強硬に主張していた崔益鉉について、彼には先見の明があったと嘆いたという。つまりここでは鎖国攘夷論こそが卓論で、開国和親論は植民地化への道を開いた愚論とされたのである。(藤田雄二『アジアにおける文明の対抗』一五頁。)
- (6) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一八四頁。
- (7) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一八三頁。
- (8) 『六月米船浦賀渡来一件聞書』『幕末外国関係文書之一』一一八頁。
- (9) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一八三頁。
- (10) 以下、加藤祐三『黒船前後の世界』二二二—二二六頁。
- (11) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一八四頁。
- (12) 『六月浦賀奉行支配組与力等よりの聞書』『幕末外国関係文書之一』五三—五四頁。
- (13) 『六月三日浦賀奉行届 老中へ 異国船の模様に就て』『幕末外国関係文書之一』一四—一五頁。なお、史料に「二艘は総体鉄張」とある。

るが、実際に鉄張りであつたわけではなく、防水のためにビッチを塗っていたので黒く見えたのである。

- (14) のちにペリー艦隊の人々を驚かせたように、当時の日本人は西洋の科学技術について比較的豊富な知識を有してはいたが、それでも蒸気船を実際に目にしたことの衝撃は大きかったと思われる。

- (15) 加藤祐三『開国』六八—六九頁。松本健一『開国・維新』七—八頁。

- (16) 艦隊に随行したウィリアムスの記録によれば、艦隊が投錨した時刻は午後四時頃となつてゐる。(ウィリアムス『ペリー日本遠征随行記』九〇頁。)

- (17) 浦賀奉行所は江戸湾を出入りする全ての船を検閲する任務を負っていた。

- (18) 『六月三日浦賀表米船対話書 浦賀奉行支配組与力中島三郎助と大尉コンチーと 渡来の趣旨に就て』『幕末外国関係文書之一』八一—九三頁。

- (19) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一八九頁。

- (20) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一八九頁。

- (21) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一八九—一九〇頁。「六月三日浦賀表米船対話書」九頁。

- (22) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一九〇頁。このとき日本側は、そのように面接を拒絶しては本国からの書簡を渡すこともできないではないかと問うたところ、アメリカ側は、上陸して直接渡すのみであると答えたという記述が日本側の史料にある。(『六月三日浦賀表米船対話書』九頁。)

- (23) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一九〇頁。日本側の史料では、これまでしばしば我が国に外国船が渡来したが、日本の高官が外国船に乗り込んで応接するという先例はないとなつてゐる。(『六月三日浦賀表米船対話書』九頁。)

- (24) ペリーが船中でつけていた日記にも、中島は一貫して「副知事」(vice governor)と記されている。また艦隊の公式記録である『ペルリ提督日本遠征記』でも中島は「浦賀副奉行」と記されている。

- (25) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一九〇頁。日本側の史料によれば、このとき他の与力も乗船しようとしたが、差し止められ、中島と堀だけが乗船を許可されたという。(『六月三日浦賀表米船対話書』一〇頁。)

- (26) 加藤祐三『黒船前後の世界』二四—二七頁。

- (27) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一九一—一九二頁。

- (28) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一九二—一九三頁。

- (29) 加藤祐三『開国』七一頁。

- (30) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一九〇頁。
- (31) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一九〇—一九一頁。「六月三日浦賀表米船対話書」一一—一二頁。
- (32) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一九一頁。「六月三日浦賀表米船対話書」一二—一三頁。
- (33) 『六月三日浦賀表米船対話書』一三一—一四頁。
- (34) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一九一頁。
- (35) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一九〇—一九一頁。
- (36) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一八四頁。
- (37) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一九二頁。
- (38) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一九三頁。
- (39) 『ペルリ提督日本遠征記』第三巻、三二—三三頁。
- (40) 『ペリ—日本遠征日記』一七三—一七四頁。
- (41) 『六月三日浦賀奉行届 老中へ 異国船の模様に就て』『幕末外国関係文書之一』一五頁。
- (42) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一九三頁。
- (43) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一九九頁。「六月浦賀奉行支配組与力香山栄左衛門上申書 老中へ 米船と応接の手續に就て」『幕末外国関係文書之一』二三頁。
- (44) 石井寛治『開国と維新』二三—二四頁。
- (45) 『六月浦賀奉行支配組与力香山栄左衛門上申書』二四頁。白旗に関する史実については疑念を表する研究者もいる。白旗に関しては松本健一『白旗伝説』に詳しい。
- (46) 『六月浦賀奉行支配組与力香山栄左衛門上申書』二四頁。
- (47) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、一九九頁。
- (48) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、二〇一頁。
- (49) 『六月浦賀奉行支配組与力香山栄左衛門上申書』二四頁。
- (50) 『概観維新史』八一頁。『維新史』第一巻、五六二—五六三頁。なお、この日香山は在府の浦賀奉行井戸弘道から、昨年中にアメリカ政府がオランダ政府を通じて今回の渡来予定を通告してきたこと、そのことを在浦賀の奉行戸田氏栄に知らされていなかったことを聞かされ、幕府が「御秘密に被成置」「於私落涙数刻に及」んだという。(『六月浦賀奉行支配組与力香山栄左衛門上申書』二五頁、)

- (51) 『概観維新史』八二頁。
- (52) 『概観維新史』八二―八三頁。
- (53) 『六月浦賀奉行支配組与力香山栄左衛門上申書』二五―二六頁。
- (54) 『六月浦賀奉行支配組与力香山栄左衛門上申書』二六頁。『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、二〇六頁。
- (55) 『ペルリ提督日本遠征記』第二巻、二〇五頁。
- (56) 井上勝生氏の指摘によれば、ペリーが命じたこの行動は、近代国際法に反するものであった。近代国際法では領海三海里の原則があり、それ以ては公海で、そこでは公海自由の原則に則つていずれの国の船も公海自由である。これに対し一国の領土が沿岸を囲み、入口が直線距離で六海里(約一二キロメートル)より狭い湾・内海は「内水」と決められ、内水は領域、その国の領土と同じ扱いである。江戸湾の入口、観音崎と富津の間は約七キロメートルであつたから、江戸湾は「内水」、すなわち日本領土と同じ扱いであつた。従つて、内水に完全武装で侵入した艦隊の行動は、近代国際法に反するものだった。ペリーの行動と幕府の反応は、合法か否かではなく、力が状況を決定するというパワー・ポリティクスの典型であつた。井上勝生『開国と幕末変革』一八二―一八三頁。
- (57) 『維新史』第一巻、五六三頁。
- (58) 『維新史』第一巻、五六四―五六五頁。
- (59) 『概観維新史』八四頁。『維新史』第一巻、五六五頁。松本健一『開国・維新』二四頁。
- (60) 『概観維新史』八四頁。『維新史』第一巻、五六五頁。
- (61) 『六月浦賀奉行支配組与力等よりの聞書』『幕末外国関係文書之一』五六―五七頁。『六月米船浦賀渡来一件聞書』『幕末外国関係文書之一』一一二―一三三頁。
- (62) 『六月浦賀奉行支配組与力等よりの聞書』五六頁。
- (63) 『維新史』第一巻、五六五頁。こうした不満については、第二章で詳説する。
- (64) 『六月浦賀奉行支配組与力香山栄左衛門上申書』二六頁。『維新史』第一巻、五六五―五六六頁。
- (65) 香山は国書以外の文書の受理に難色を示したが、アメリカ側は国書の正本・副本・訳本とペリー書簡の同時受領を主張した。
- (66) アメリカ側は久里浜より近くでの授受を望んだが、香山は当日の混乱を避けるために久里浜での授受を主張した。
- (67) 以上、『六月七日浦賀表米船対話書』浦賀奉行支配組与力香山栄左衛門と中佐ビュツカナン同アダムス大尉コンチー等と国書受取方に就て、『幕末外国関係文書之一』一八〇―一八四頁。『六月浦賀奉行支配組与力香山栄左衛門上申書』『幕末外国関係文書之一』二八頁。『概観維新史』八四―八五頁。『維新史』第一巻、五六五―五六六頁。

- (68) 『概観維新史』八五頁、『維新史』第一卷、五六七頁。
- (69) 『維新史』第一卷、五六八頁。『ペルリ提督日本遠征記』第二卷、二二六頁。
- (70) 『ペルリ提督日本遠征記』第二卷、二二六—二二七頁。
- (71) 「六月浦賀奉行支配組与力香山栄左衛門上申書」、『幕末外国関係文書之』二九頁。六月九日浦賀奉行書翰 米国使節ペリーへ 国書受取の件。『幕末外国関係文書之』二七一頁。『維新史』第一卷、五六八—五六九頁。『ペルリ提督日本遠征記』第二卷、二五一—二五二頁。
- (72) 『ペルリ提督日本遠征記』第三卷、一一頁。
- (73) 「六月九日江戸内海米船対話書 浦賀奉行支配組与力香山栄左衛門と中佐ビュッカナン同アダムス大尉コンチー等と 内海乗入引戻の件」、『幕末外国関係文書之』二八二—二八四頁。『ペルリ提督日本遠征記』第三卷、一九頁。なお、艦隊の記録によれば、香山と堀は艦隊が用意した軽食をいたく喜び、香山と堀は「たちまち皿も瓶も空」にして、さらに「腹はいっぱいなのに大きな袖にパンやハムを入れて持って帰る」など「まことに陽気な場面が現出され」たと記されている。
- (74) 『ペルリ提督日本遠征記』第三卷、一一頁。
- (75) 『ペルリ提督日本遠征記』第三卷、一一頁。
- (76) 『ペルリ提督日本遠征記』第三卷、二二頁。『維新史』第一卷、五七一頁。
- (77) 「六月一日江戸内海米船対話書 浦賀奉行支配組与力香山栄左衛門と乗組将官と 内海乗入引戻方並物品贈答に就て」、『幕末外国関係文書之』三三三—三三六頁。『ペルリ提督日本遠征記』第三卷、二三頁。なお、この交渉のあと日米双方の物品贈答となり、そのあとは軽食が供された。香山はシャンパンを飲み、「アメリカ人を敬慕していると告白し、別れの際には涙を禁じえないと公言した」と艦隊の記録にある。
- (78) 徳富蘇峰『近世日本国民史』第三二卷、四頁。

# 文献一覧

- 石井寛治『大系日本の歴史』二 開国と維新 小学館、一九八九年。
- 石井孝『日本開国史』吉川弘文館、一九七二年。
- 維新史料編纂事務局『維新史』全六巻、明治書院、一九三九年。

維新史料編纂事務局『概観維新史』明治書院、一九四〇年。

井上勝生『日本の歴史一八 開国と幕末変革』講談社、二〇〇二年。

サミュエル・W・ウイリアムス『ペリー日本遠征随行記』洞富雄訳、雄松堂出版、一九七〇年。

岡義武『近代日本政治史Ⅰ』創文社、一九六二年。

フランシス・L・オークス『ペルリ提督日本遠征記』全四巻、土屋喬雄・玉城肇訳、岩波書店、一九四八年。

同『ペリー艦隊日本遠征記』第一巻、オフィス宮崎訳、栄光教育文化研究所、一九九七年。

小野正雄『幕藩権力解体過程の研究』校倉書房、一九九三年。

加藤祐三『黒船前後の世界』岩波書店、一九八六年。

加藤祐三『黒船異変』岩波書店、一九八八年。

加藤祐三『開国』『岩波講座日本通史第二六巻 近代一』岩波書店、一九九四年。

兼近輝雄『日本近代政治史Ⅰ』敬文堂、一九九六年。

アンドルー・ゴードン『日本の二〇〇年』上巻、森谷文昭訳、みすず書房、二〇〇六年。

田中彰校注『日本近代思想大系一 開国』岩波書店、一九九一年。

田中彰『日本の歴史一八 開国と倒幕』集英社、一九九二年。

田保橋潔『近代日本外国関係史』刀江書院、一九三〇年。

東京帝国大学文科大学史料編纂掛編纂『大日本古文書 幕末外国関係文書』第一巻〜第三巻、東京帝国大学、一九一〇年。

徳富蘇峰『近世日本国民史』三一 彼理来航及其当時』時事通信社、一九六五年。

日本史籍協会編『阿部正弘事蹟』全二巻、東京大学出版会、一九一〇年、覆刻一九七八年。

藤田雄二『アジアにおける文明の対抗―攘夷論と守旧論に関する日本、朝鮮、中国の比較研究―』御茶の水書房、二〇〇一年。

マシュー・Ｃ・ペリー『ペリー日本遠征日記』金井圓訳、雄松堂出版、一九八五年。

本庄栄治郎『日本経済思想史研究』上巻、日本評論社、一九六六年。

升味準之輔『日本政治史』第一巻、東京大学出版会、一九八八年。

松本健一『白旗伝説』講談社、一九九七年。

松本健一『日本の近代―開国・維新一九五三―一八七一』中央公論社、一九九八年。

丸山真男『開国』『忠誠と反逆―転形期日本の精神的位相―』筑摩書房、一九九二年。

『水戸藩史料』上編乾、吉川弘文館、覆刻一九七〇年。

吉野真保編『嘉永明治年間録』上巻、巖南堂書店、一九六三年。